

添牙いるは

Soekiba Iroha

イラスト：ターヤ

忍者の

居ぬ間に

つまみ喰い

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止



そのゲームは一世代前、とあるアメリカ人によって開発されたらしい。

プレイヤはダンジョンの奥深くを目指すために、様々な職業のキャラクターを集めてパーティを組む。しかし、その中に一際異彩を放つ職業ジョブがあった。

その職業は、レベルが上がっていくごとに防御力にボーナスを得て、いずれは『戦車並み』と呼ばれるほどの強度を誇ることになる。

但し、このスキルを発動させるには条件があった。

それは——武器を、一切装備しないこと。

何か一つでも身に着けてしまえば、通常通りのステータスに逆戻りなのである。つまり、ある程度レベルが上ったそのジョブは、何も装備しない方が強い。

全裸であることが戦車並み。

それが……『忍者』なのである。

「ほら、先輩。まだまだ行きませよ！」

そんな忍者に惚れ込んでしまった彼女は……ある意味戦車なのかもしれない。一切の防具を身に着けることなく、僕を教室の外まで引きずり出してしまった。そしてそのまま、二人で夜の廊下に足音を響かせてゆく。パタパタというゴム底ではなく、素足によってペタペタと。

オートロックにより内側からのみ開くことのできる非常口。そこから裏庭に出てみ

ると、駐輪場は閑散としていた。下校時刻から三〇分以上経っていて、殆どの生徒は下校済み——ということはある。それに加えて、三月半ばともなると、三年生はそもそも登校自体していない。春休みに片足を突っ込んだ夜の学校は、いつも以上の静けさに包まれている。

だが、それはあくまで校内だけのこと。午後七時も回っていないこの町は、眠りにつくにはまだ早い。家々の窓の多くには明かりが灯っており、正門前を走るバス通りには絶えず排気音が行き交っている。

それと比べれば——裏側であるこちらはそこまでの慌ただしさはない。とはいえ……

金網フェンスの向こう側をシャー……とライトを光らせた自転車を通り過ぎていった。あの細道は、これからも帰宅のために断続的な人の流れがあるのだろう。

そんな場所を臨みながら……僕たちは立っている。手を繋いだまま、揃いの姿で。

心許なさを感じさせない力強さに、僕は更なる前線へと引かれていく。

「もっと遅い時間なら表に出られたんですけどね」

彼女が目指していたのは、ここだった。

人通りから逃げることなく、逆に近づいてゆくために。

「この時間、この物陰なら、外からはよく見えないんですよ。……まじまじと覗き込まない限りは」

駐輪場の奥には、どこから来たのか、持ち主不明のまま長期間放置された自転車が固めて置いてある。さらにその向こう側には申し訳程度の外周緑地。明るい緑色の格子の内側に暗い緑色が茂っている。

そして、そのさらに向こう側を……今度は乗用車が走り抜けていったようだ。

ここは、今の僕たちにとって極めて危険な場所である。

それは解っているのに……二人の本能は気づいていない。

この状況を知らせるために、彼女は警笛レバーを押し下げる。ここまで繋いできた右手ではなく、空いていた左手の方で。

斜め上へと付き出した取っ手をクイクイと二・三度押し下げてみるも……そこからサイレンが鳴り響くことはない。ただ、先の方からトロリと機械油が垂れるだけである。とんでもない欠陥品である。

こんな挙動ではあるものの、微笑む彼女はとても嬉しそうだ。

「……うん、大丈夫そうですね。やっぱり、コースケ先輩はあたしが見込んだ人でした！」

今度は彼女が自身の挙動を確かめようとしている。本人によって握られた僕の手が

導かれていくのは——女の子の冷却液の溜まり場。柔らかな二本の柱の間は、少し冷たい。つるつると滑らかになっており、激しく液漏れしているようだ。その原因となつている割れ目を塞ごうとするも、どうやら手遅れらしい。指は丸ごと中へと飲み込まれてしまい、その隙間から温かなものがトロトロと止めどなく溢れ出してくる。

「ほら、あたしも……こんなになっちゃってます。これ以上は待てませんよ♥」

コツ、コツ、という足音に振り向くと、背広姿が粗い木々の隙間にチラついている。もし彼が僕らの存在に気づき、立ち止まりでもしたら……いまさら隠れても遅いだらう。

ここはいけない。

ここはダメだ。

それは明確に理解しているのに……

指先に纏わりつく指先が、僕を捕らわれてしまっている。

纏わりつく指先が、僕を捕らえてしまっている。

「はうんっ」

蜜壺の内側の花卉——そこに触れると、彼女の四肢から力が抜けてゆく。結び合っていた僕の手から細い指が零れ、硬いアスファルトの上に尻餅を搦いてしまった。

しかし、そこから立ち上がるうとはしない。そのまま背中を付けて、ゴロリと仰向

けに寝そべってしまおう。

「良かったあ……何とか星は見えてますね。あたし、こんな夜空を眺めながら——」

——初めてを迎えたかったです♥

彼女の名は、埋<sup>まい</sup>竹<sup>たけ</sup>礼<sup>れい</sup>菜<sup>な</sup>。根底から、全力で——彼女は忍者をまちがえている。



忍者の居ぬ間につまみ喰い

添牙いろは

長らく世話になった我が家と別れを告げる日が刻々と近づいてきている。

幸いなことに、持っていくような私物は殆どない。高校に入る前にパソコン関連はすべて破棄され、ゲーム関連のものは父が死んだ時に自らの手で捨ててしまった。

しかし、そこに後悔はない。僕の中に、父の教えはしっかりと根付いている。開発環境は刻々と変化してゆくとしても、その基礎となる理念が揺らぐことはないだろう。一度は失ってしまったゲーム開発の夢は、今ではもつと大きな——システム開発という目標に向いている。来月から通い始める大学で、僕はその基礎を学ぶつもりだ。知っている上で無理をするのと、知らずに無茶をするのでは雲泥の差がある——そんな父の教えを守るために。

さて、その大学なのだが、随分辺鄙へんびな山の中に建っているため、僕は四月から独り暮らしである。学校所有の学生寮というものはなく、この金額以内で任意の物件を探してくれ、という仕組みらしい。それを見越して、学校付近のワンルームはどれも同額。早く探し始めた者から順に、良い家を見つけることができたようだ。

斯く言う僕は……まあ、学校に通うには悪くない。通学路の高低差もあまりないし。コンビニは学校内にあるようだし、駅は……そう使うこともないだろう。

ともあれ、引越しの準備などは早々に済み、僕が精を出していたのは実家の片付けの方だ。あの母親は仕事が不規則なこともあり、家事の類が大雑把だから……。

せめて出て行く時くらいは綺麗にしておきたい。

そんなわけで、平日も休日もない日曜日の昼下がりに、僕は台所の整理に精を出していた。中途半端に買い置きを残したところで、きつとダメにしてしまうだろうし。

母親の今日のシフトは昼勤で、帰ってくるのは夕方過ぎになる。それまでに残り日数を考えて、こいつらを使い切るように献立を考えなくてはならない。

一通り食料品をテーブルの上に並べたところで……

ピポーン！ ピポーン！

……鬱陶しいほどにせっかちな呼び鈴が鳴り響く。

この行儀の悪さは、荷物の配達の種類ではない。僕の知り合いで、なおかつ……僕に對して苛立ちを覚えている者の仕業だろう。

覗き穴から確認する必要もない。開けてやった扉の先には、予想通りの人物が立っていた。

「……やっぱりお前か、鷹池たかいけ」

「そうよ。悪い？」

このメガネの仏頂面を拝むのも卒業式以来か。これまで見慣れてきた制服に袖を通すことも、もうないのだろう。白いニットにサブリーナパンツ。膝下の生足は健康的というより暴力的に感じてしまう。スカートを気にせず容赦なく蹴りを振り回せるよ

うになったそれは、最早立派な凶器といえよう。

そんな彼女に対して、つい身構えてしまうのは——僕と鷹池の間にはつい先日アレコレあつたばかりなのである。こうして二人きりで顔を合わせることも自体、少なからず気不味い。

どう接したものと戸惑う僕に対して、当の鷹池は驚くほどに平常運転である。こちらの都合も聞かずに勝手に靴を脱いで上がり込んで来た。

そして、ダイニングのテーブルから椅子を引つ張り出すと、背もたれを九〇度横に回し、僕の方に向けてドスンと座る。ふわりと舞い広がる長い後ろ髪は、清楚というより、帝王のマントと呼ぶ方が相応しい。

豪快に足を振り上げて片膝に乗せる振る舞いも、スカートの心配がいらぬ私服だからこそだろう。学校でも見られなかった堂々とした振る舞いが何とも憎らしい。

そして、肘を突く卓上に盛られた食材の山を見て一言。

「ナニコレ。パーティーでも開くつもり？」

「片付け中だ。お前、何しに来たんだよ」

鷹池がいつもの調子なので安心していただけだが……それはとんでもない勘違いだった。

「はあ？ 女子が好きな男子に逢いに行くのに理由いるの？」

本当にいつもの調子で、ぶつきら棒に……こんなことを言つてのけるのだから恐ろしい。

「……ナニ赤面してんのよ。こつちの方が恥ずかしいわ」

鷹池は心底嫌そうに顔を歪める。まあ……そうだよな。僕が礼菜に告白している最中に教室に乗り込んできて、有無を言わず自分の想いを告げた上……キスマでしてきたのだから。

とはいえ、こんなことで僕と礼菜の想いが揺らぐことはなく、結局交際は始まった。その結果、鷹池はフラれたことになるんだよな……他でもない、この僕に。

「ったく……私と礼菜がアンタ取り合つてたの知っていながら何も言わないとかズルイ男だわ。ナニ？ いつからあのコのこと好きだったの？」

「それは……いや……いつの間にか……てかお前、好きな男に文句を言いに来たのか!？」

いつからか……と訊かれても、自分のことながらよく分からない。ただ、あの日、礼菜から教室で待つ、との手紙を受け取った時には……もう、自分の意志は固まっていた、と思う。

「彼女できて舞い上がってんでしょ？ フラレ女の愚痴くらい寛大な心で受け流さない」

物凄く……物凄く、鷹池はいつもどおりだ。いつもどおりの口調で……あり得ない痴話喧嘩を吹っかけてくる。これでは、こちらとしてもどう対応していいのかわからない。

「お前……言つてて恥ずかしくないか……？」

きつと、僕はとんでもなく間抜けな顔をしているのだろうな。そんな僕を見て、鷹池は特上のため息を吐く。

「……こちらら、ずっと好きだった男をポツと出の後輩に搔っ攫われてんの。失うものなんて何もないワケよ。Understand?」

「待て。ずっと、って……あの話が出たの半年くらい前だろ!？」

さり気なく英語を混ぜて誤魔化そうとするな。

これに対して、鷹池は更なるため息。

「あのねえ……アンタみたいな落第生、恋でもしてなきや相手になんてしないっての」  
恋……って……! あまりに似つかわしくないフレーズに、心臓が痛いくらいに打ち鳴らされているのが自分でも判る。初めて鷹池からそんな雰囲気のことを匂わせた時だって、あくまで雰囲気だけだったし、それなりにぼかしてくれていた。

しかし、彼女自身が言うように、もう失うものがないのだろう。何もかもを包み隠さず、直接的な言葉で僕に訴えかけてくる。

「あーあー。五年も六年も重ねてきた私の思い、どーしてくれんのよ！」

「五・六年!？」

それって殆ど……出逢ってすぐの頃じゃないか!？」

驚く僕に向けて、鷹池は不愉快そうに頭を振る。その仕草は、在学中、僕が課題をすっぽかしたり試験で赤点を取ったり……そんな時に見せていたものだ。それを今、ラノベのヒロインばりに鈍感男へと向けている。ずっと封印してきた「乙女」の部分を全開放しているようだ。

「やっぱ、想いは言わなきゃ伝わらないモノねえ……今後の人生の教訓とさせてもらうわ」

それで、こうしてあけすけにぶっちゃけているのか。何しろこれまで……いや、中学生の頃はまだ可愛かったんだよ。高校に入って、僕が部活に傾倒するあまり成績がガタガタになって……その頃から、どんどんキツイ感じになって……。

もし、そうなる前に鷹池から告白されていたら、違った結果になっていたのだろうな。

だとしても。

今の僕は礼菜と付き合っている。だから、下手な未練は引きずるべきではない。それは分かって、いるのだけど——

鷹池の口元がニンマリと歪む。どうやら、僕の気の迷いを汲み取りやがったらしい。それもそうだ。ただ付き合いが長いだけでなく、本人曰く、僕に恋してきた、とのことである。僕以上に、僕のことを知り尽くしているのかもしれない。

だからこそ、僕はこれ以上踏み込ませないように先手を打つ。

「いまさら伝えられても、僕にはどうにもできないぞ」

解りきっていることなのに、改めて口に出されて鷹池の目元が力強く伏せられる。涙を堪えているようで、見ていてとても痛々しい。

「……わーってるわよ、んなコト」

開かれた瞳は少し潤んでいるようだ。

「だから、これから別の恋を探さなきゃなんなくてね。それなのに……私には弱点があるのよ」

「弱点……？」

フっっておいて言うのもアレだが、鷹池は結構な美人である。長くて癖のない長髪は紺のセーラー服によく映えていたし、スタイルだって……ウン。

それに学力だって申し分なく、教師ウケもいいため、内申点は4と5しかなかったくらいだ。もちろん、五段階評価で。

強いて欠点を挙げるのなら――

「……プレッシャーに弱い、よな……」

それで、三ランクは低い僕と同じ大学には落ちて、超難関の国立大には受かったのだから目も当てられない。

が、それではなかったようだ。

「違うわよ！ ……や、それもあるけど…でも、そーじゃなくて、恋愛において致命的な…その…」

こんな優秀な女から好き好き言い寄られて、断れる男もなかなかいないぞ。僕だって、他に好きなコがいなければ、何だかんだで受け入れていたかもしれないし。

これまでハキハキと言いたい放題だったクセに、ここに来て異様に恥じらっている。鷹池が抱えているコンプレックスはそれほどのものなのか？

軽く目を閉じて深呼吸を二回ほど。

そして、カッと双眸を開くと――

「きつ、輝山、アンタ、アソコ見せなさいッ!!!」

言われて思い出した。それが、彼女の間抜けた弱点だったのである。

詳しくは省くが――彼女は中学生の頃、騙し討ちのような形でクラスの男子の股間を握らされてしまったのだ。それも、ナマで。

この一件がトラウマとなり、彼女は男の股間を見ると正気を失ってしまう。これまで築き上げてきた委員長キャラのすべてが崩れ落ち、無様なドジっ娘に成り果ててしまふのだ。

それは作り物の彫像だろうが記号的なイラストだろうが、あまつさえ連想させる響きの単語にまで影響は及ぶ。はつきりいつて重症だ。

確かに、折角男と付き合い始めて、そのようなムードになった時に取り乱しては百年の恋も冷めかねない。

しかし、それを恋人持ちの男に要求するか……!?

鷹池自身も、マズイことと解っているらしい。それでも逃さず、僕に対して追撃をかけてくる。

「こうして無事卒業できたのは誰のお陰？」

グッ!?

「あ、の時、私がみんなを押さえるどころか、教室の中に招き入れてたら……どーなつてたカシラ？」

礼菜が告白してくれた時、彼女は素っ裸だった。僕への好意と共に、自身の性癖を伝えるために。そして、二人の想いが繋がろうとしていたところで、鷹池が部屋に乗り込んできたのである。その上、彼女を追うように部員の間にもこつちに向かつてきていたのだからあわや大惨事だった。

失恋直後だったことを考えれば、死なばもろとも、と自暴自棄になったとしてもおかしくない。だが鷹池は冷静に、後輩たちを廊下で追い返してくれた。

こうして、教室という公共の場で裸になっていた礼菜は事なきを得たのである。あ

んなことがバレていたら、僕とてタダでは済まなかっただろう。

あの時、鷹池は言っていた。

『これ、私からのツケにしておくわ。後で絶対に払ってもらおうからね』

そのツケをこんな形で返せ、というのか……!?

「カラダのツケはカラダで払うモノ……違う?」

「違うような気がするんだが……」

「気の所為よ。違わない」

キツパリと言い切られてしまった。恋人に黙って他の異性に局部を開示する……これを礼菜が知ったらどう思うだろうか。……怒るにせよ、泣くにせよ、確実に彼女を悲しませてしまう。

だからこそ、鷹池もそれを承知で僕の逃げ道を塞いできた。

「……私だって、アンタらを破局させるほど性格悪くないわよ。あのコには黙つてあげるから……今だけは私に協力しなさい。もうすぐこの家出るんでしょ」

そうしたらなかなか逢えなくなる。長い別れの前の置き土産が欲しい、ということなのかもしれない。

そんな切実な……初恋の相手の頼みを断れるほど、僕は強い男ではなかった。

何だか、女の武器を全力で奮って、男の弱点を容赦なく撃ち抜いてきた気がする。

鷹池が要求してきたのは、股間をズボンの穴からポロっと露出<sup>だ</sup>すだけでは済まず…

：「全部脱ぐのよ。わっ、私も脱ぐし！」

「お前は脱ぐ必要ないだろ!？」

これに対する彼女の返答は、

「途中で萎えられても困るのよ。全裸の女子が目の前にいれば、興奮しつぱなしですよ？」

…：…実際、目当ての場所は熱<sup>い</sup>り勃<sup>た</sup>起<sup>た</sup>ったままなので、これに反論<sup>はんろん</sup>の余地はない。

こんなところに親が帰ってきたらどうする、という言い訳にも、彼女は周到に事前情報を掴<sup>つか</sup>んでいた。

「輝山のお義母様、今日は昼勤だったわよね。七時過ぎまで帰ってこないはずよ」

何で他人の親の勤務ソフト知ってるんだ!? という疑問については、単純明快。

『家の前で張っていた』とのこと。以前、僕が礼菜の家にお邪魔した際には半日以上も監視していたみたいだからなあ…。それと比べれば、出勤時間の前後数十分を押しさえることなど造作もないということか。

斯くして、僕はダイニングで全裸になっている。彼女の方も、眼鏡を残して何も身に着けていない。その眼鏡とて…：伊達なのだから掛け直す必要はないと思うのだが。様々な思いが巡る中、僕は鷹池と見つめ合っている。

羞恥心。

そして——罪悪感。

これらに苛まれて、僕は肩より先に視線を下げる事ができない。

そこに、鷹池本人から檄が飛んでくる。

「コラっ！ ちゃんと見なさい。萎えたらどーすんのよ」

その言い分は実に堂々としているが……彼女の方は、僕の身体を見ていない。レンズを通して、こちらの両目だけを穴が空くほど凝視している。まあ、普通に見えるなら、最初からこんな不実なマネをする必要もないのだが。

彼女が臨もうとしているところは、確認するまでもなく、このシチュエーションだけで憤っている。

今更あえて彼女の裸体に頼る必要もない。

が、見たくないはずもない。

その欲望は——彼女の言葉によって頭から叩かれてしまったようだ。

思わず、

反射的に、

言われるがままに目を下の方へと落としてしまう。

そこにあるのは……

ニットのセーターを脱ぎ、

中に着ていたシャツのボタンをポコポコと外し、

ブラの留め具も迷うことなくパツンと外し——

その内側から溢れ出してきたものである。

一度見てしまつては……もう逃れることはできない。

あまりに味気ない脱ぎ方ではあつたが、その中身は本物だ。

二つの乳首がツンとこちらを見上げ、そこを染め上げる温かな桜色に僕は魅了されてしまつている。

これは、僕を萎えさせないため——つまり、僕に性衝動を向けさせるために露わにされたものだ。

しかし……

そこに触れることは許されない。

唇に含みたいという欲求だけが口の中に広がり、思わず生唾を飲み込む。

彼女の性の割れ目を覆うのは、この立派な乳房に見合った陰毛。

その土壌となるのは、柔らかかそうな二枚の肉。

その隙間からトロリと溢れ出てきたものが、彼女の股下で蛍光灯を照り返している。内腿ですらこうなのだから、きつとあの中はしつとりと濡れ湛えているのだろう。

僕はもう、その味を知つてしまつている。

それを交えることが、どんなに幸せな気持ちになれるか、我が身をもって経験して

しまっている。

その温もりを求めて、ビクンビクンと爆ぜるのを抑えられない。

もし、彼女が肩から下に目を向けられるようなら、白い目で見られていたことだろう。

そんな僕に向けて、鷹池が一步、また一步と近づいてくる。

その表情に先程までの余裕はない。

鼻の頭まで真っ赤に染め、

肩を怒らせて、

胸が触れそうな距離で屹立している。

目の前に迫ってきた二つの誘惑に、僕の血流も一気に高まっているようだ。

この状況で我慢し続けるなど、もはや拷問に近い。

だからこそ……

ツケの支払いに値するのだろう。

「輝山、アンタ……輝山よね」

「オ……オウ……」

当たり前の確認に、僕は当たり障りない回答しかできない。

「だから、これは、輝山の……輝山のだから……輝山のだから……！」

荒くなった鷹池の呼吸が僕の鎖骨に届いている。

真つ直ぐに見据えて、僕が僕であることを意識に刷り込んでいるようだ。

「輝山……大好き……愛してる……好き……好き……好き……好き……っ！」

続いて、僕への想いの確認。

こうやって必死な形相で呟かれると、偽りの自己暗示を掛けているようにすら思えてくる。

が、彼女はこれから大嫌いなモノに触れなくてはならない。

それを僕への好意で乗り越えようとしているのだろう。

「輝山のだから……輝山のだから……輝山のだから……！」

鷹池の両手が少し持ち上がる。獲物に狙いを定めるネコのように、ゆつくりと、緩やかに。

「大好きな輝山の……輝山……大好き……大好き……——大好きヒイツツツ！」

ブン、と振り下ろされた両手は、丁度僕の股間に合わせて閉じられた。子供が草の上に止まるバツタを捕まえるような勢いで、僕の身体の飛び出たところが彼女の手の平に挟まれる。

「ふ……ふえ……え……ええ……」

気持ちの悪いものを握らせてしまつて、本当に申し訳ない。彼女とて、本当はすぐにでも放したいのだろう。

しかし、未だしっかりと掴んだままだ。両目を涙に濡らして、声を震わせながら、

嫌な感触に耐えている。

その健気さに……僕はつい、彼女の肩を抱いてしまった。

「大丈夫だ！ 弱点を克服するんだろ!?」

この一言が、彼女の中に染み渡ったように見える。パチリとまばたくと一筋の雫が零れ落ちたが、もうその奥に恐怖はない。

「コレ……こーちゃんのだよね……？ こーちゃんの……おちんぼ……だよね……？」  
そこに触れたことで、言葉遣いが昔に戻っている。僕への呼び名も、同様に。優等生の外面で飾る前の、素の鷹池の姿だ。服も外聞も脱ぎ去って、本当の鷹池が戻ってきてくれた気がする。

「ああ、僕の身体が鷹池に握られてる。間違いないよ」

それを証明するために、僕はピクピクつ、と股間に力を込める。それは握りこむ指を通してしっかりと伝わってくれた。

「ん……こーちゃんのだもん……だったら……こーちゃんだっ！」

僕の手から抜け出すように、彼女の身体が唐突に屈められた。

僕の足元で鷹池は、初めて見るものと対峙している。

トラウマを植え付けられたあの日、外から見えない箱の中で握らされたものを、目隠しを取り除いて、直に対面しているのだ。

それも、彼女の女体カラダを欲して血液が流れ込んでいるところを。

「これが……おちんぼ……これが……こーちゃん……♡」

性器イコール僕、と結び付けないで欲しいのだが……今は彼女の好きにさせた方がいいだろう。せつかく過去を乗り越えられそうなのだし。

だったら、恥ずかしいけれど……気が済むまで観察させておこう。

「こーちゃん……おちんぼ……あつたかあい……」

それまで恐れていたのが嘘のようだ。甘い吐息をこぼしながら、鷹池は硬くなったところに頬ずりしている。

「こっちはきんたま……こーちゃんの大切なきんたまあ……」

柔らかなままぶら下がる皺袋までも、愛おしそうに撫で始めていた。

「きんたまはモジャモジャなんだね。おちんぼはツルツルなのに。んにや、ペトペト……かな？」

危うい方はそつと手の平で包み、丈夫な方をほつぺたでペトペトと感触を楽しんでいたが、その感触はふいに――

「ちゅっ♪」

尖った柔らかさを突き付けられてしまった。

「えへ。こーちゃんのおちんぼにチュウしちゃった☆」

一度目を乗り越えればもう抵抗はない。二度、三度、とチュツチュツチュと唇を跳ね回らせている。

この優しさが、僕の身体にはむず痒い。意図せず跳ね上がったしまった正直すぎる僕の欲望に、鷹池は忠実に応えてくれる。

「はむっ♥」

敏感なところが温かなところに取り込まれてしまった。

生まれて初めて、僕はこんなところを咥えられている。

礼菜とは……その……すぐに結ばれてしまったから。

のんびりやりあえるような状況でもなかったし。

「ふっ、ふう……むう……むうー！」

鷹池の舌が忙しく這いまわり、僕のすべてを舐め尽くしている。特に、狭くなっている隙間を見つけると、そこに積極的に振じ込んでくるようだ。僕のより弱いところを探り当て、ジワジワと感度を高めてゆく。

「クッ……ン」

思わず腰が折れてしまったところに、

「む……むふ？」

鷹池の瞳がニンマリと笑う。自分の舌に性感<sup>カク</sup>じる様が面白いらしい。一旦根本の方まで深く吸い込んだところで、チロチロと舌先でくすぐりながら引つ張り出していく。そして、窄めた唇で傘を巻き上げるようにチュポンと唇から引き抜いた。

「やっぱり、こーちゃんのおちんぼだあ……♥ こーちゃんの身体なら、私、嫌いな

ところなんて一つもないよ♪」

今度は口に含まない。舌だけ出して、性感<sup>カシ</sup>じやすいところだけをピンポイントに攻め立ててくる。コイツ、何でこんなに上手く……と下を向くと、上目遣いの鷹池と目が合った。

「こーちゃん、気持ちいい？ 私の舌で……もつと性感<sup>かん</sup>じて！」

そうか、鷹池はずっと僕の反応を見ながら舐め回していたのか。だから、こんなにも狙いすましたかのように……ンッ……！

「ふふっ、こーちゃんがモジモジすると、このおちんぼがこーちゃんだって実感湧くなあ♥」

今度はすべての指でゴシゴシと擦りながら、先端の割れ目に舌を這わせている。

鷹池の指使いの前に、溢れてくる汁を我慢できない。

それを彼女は愛おしそうに掬い取っていく。

舌遣いの気持ちよさだけでなく、その献身的な仕草に、僕の奥から大きなものが迫ってくるようだ。

「鷹池……もう……！」

「あーんっ♥」

短く答えて、頭のところを唇の向こう側へとスッポリ収めた。その上で、袋を揉みしだき、枝を擦る。



のに。

もしかしたら、これまで不自然な形で押さえ込んできただけなのかもしれない。それが一気に爆発して……今では喜々として、力を失いかけたところ食後のキスを交わしている。

しかし、それだけでは物足りなくなってきたらしい。一滴の口付けは雨のようにその勢いを増してゆき、ついには彼女の両腕はガツシリと僕の尻を捕らえる。

そして、キツと僕を見上げて、こう言った。

「私、おまんこにこーちゃんのおちんぼ欲しい！」

それは……っ！ と抵抗する間もなく僕は床に押し倒される。

「おちんぼは……おちんぼみるくは……おまんこに……ッ！」

せかせかとよじ登ってくる鷹池は勢いのままに僕と繋がるうとしているようだ。さすがにこれ以上は……ダメだっ……！

「待て鷹池！」

僕は咄嗟に彼女の割れ目に指を埋め込んだ！

「はぁんっ!？」

ベチャ、という水音を掻き消すように鷹池の嬌声が弾む。辛うじて動きを止めたとこで僕は逆に彼女の身体をひっくり返した。

「僕も舐めてやるよ！ 舌には舌だろ!？」

「ヤだ！ おちんぼが——んふうっ♥」

有無を言わさず足をこじ開け、その間に追突する勢いで鼻先を突つ込む！

思わず押し倒してしまったが……こうして目前で女のコの股の間を直視するのは初めてだ。礼菜の時は薄暗かったし、観察している余裕なんてなかったし。

間近で見る鷹池はうっすらと割れ目を開かせ、中から桃色のひだがこぼれ出ている。そして……ずっと我慢していたんだろうな。その外側から腿の方までヌルヌルに滴っていた。

ここに触れても、いいのだろうか……？

いや、だが、ここで燻らせては、こちらの身が危険に晒される。

やるしか……ないか……っ！

僕は邪な想いに言い訳を充てがって、女のコの間に両手の指を差し入れる。

そこは、何だか……ポウルに落とされた溶き卵のようだ。

その自身の感触に僕の胸は高鳴っていく。

彼女の中をもっと見たくて……堪らない……！

ねちやあ……と外側が大きく開かれると、溜め込まれていたものがタラリと流れ落ちてゆく。

それでも彼女の熱は止まらない。熱しきったところを冷ますように、次から次へと溢れ出てくるようだ。

女のコが性感<sup>カ</sup>を感じる場所は、きつと……ここだろう。僕は鷹池の秘所へと唇を近づけていく。

鷹池は、それに抗わない。

あの鷹池が……

眉をひそめて事あるごとに怒鳴り散らしていた鷹池が……

僕の舌を受け入れてくれる……

……のか……？

「ひやうんっ！」

僕が彼女に触れると、そこから波紋が広がるように女のコが波打った。

僕に、性感<sup>カ</sup>じててくれている。

鷹池が言っていたとおり……何だか嬉しい。

それで、もつともつと彼女に性感<sup>カ</sup>じて欲しくて、舌でザラザラと撫で回し続けた。

「あつ、ああ……はつ、やあ……♡」

きつと、ここ以外も触れて欲しいのだろう。舌を薄い二枚の間を通し、そのうちの

一枚を唇で挟んで引つ張つてやる。

「んんっ、んふう、あはあ……！」

パタパタと震えていた膝下が、僕の背にどっかりと乗りかかってきた。そこには僕を離すまいとする強い意思が感じられる。

舌をツルツルと後ろの方へと流していくと、そこには小さな穴が空いていた。きつと初めての膜に覆われているのだろう。ここにあの勢いで突入していたら……間違いなく鷹池のヤツ、とんでもない悲鳴を上げていただろうな。慎重に、ゆっくりと交わりあつた礼菜でさえ、帰り道ではガニ股になつていたというのに。

ここは、鷹池と結ばれるべき相手のために取っておこう。僕は再び女の感覚が集まるところへと引き返していく。そして今度は突起の周りを指で引つ張り、剥き出しにして直接味わわせてもらつた。

「ひやつ、はあつ、ああああ……!!」

一際大きく身を振らせると、甲高い歓声を上げる。今までで一番性感感じてくれたよ  
うだ。

それならば、ここからは舌は離さず、肉ひだの方は指で捏ね上げることしよう。  
親指と人差し指で薄い方を摘みつつ、さらに外側から中指で厚い方をも。

「もつとつ！ あつ、ああ……もつと！ もつとおお♡」

蜜は止めどなく溢れてくる。

腰はガクガクと震えている。

鷹池の中で、快感がどんどん大きくなつてくるようだ。

それはもう、本人の中では抑えきれないほどに。

「あつ、あつ、絶頂っ、絶頂っ、絶頂ウウウウ♡♡♡」

大きく腰が跳ね上がると、僕の背中に当てられていた踵がグイグイとめり込んでくる。

それに押されて、彼女の下半身とデープキスを強いられてしまった。

鷹池も絶頂てくれたようなので、これで落ち着くかな。

……と油断していたところに——！

チヨロつ……

鼻先に感じた水圧は、より強く、勢いを増してゆき……！

プシャアアアアアアア……

「あつ、ああ……潮吹ちやつたあ……お漏らししちやつたあ……♪」

そう言いながら、鷹池には恥じる様子も、止める様子も、そして、僕を放す様子もない。顔面にビチャビチャと注がれる鷹池の潮を、僕は目を閉じてやり過ごしている。「いいっ、いいっ……いいくくく……」

ズルリ、ドスン、と鷹池の両足が床に落ちた。噴水ももう止まっている。鷹池もつ

いに力尽きたらしい。

だが……この惨状をどうしてくれよう!?

「おい、ダイニング水浸しにしやがって……!」

顔を上げると、全裸のメガネ女が満足そうにのびのびしている。そのツラをキッと睨んでみるも、いつもの調子で逆に睨み返されてしまった。

「輝山も全部飲めば良かったのよ。私みたく」

そう、首から上はいつもの調子なのに、そこから下は肌色で……サ克蘭ボがトツピングされた厚いマシユマロが胸に乗って上下している。僕から見られても、鷹池は隠そうともしない。ただゆったりと、僕に晒している。

そんな彼女を……不覚にもちよつと可愛いと思ってしまった。

僕には礼菜がいるのに。

礼菜以外の女に心を動かされてはいけないのに。

「……で、克服はできたのか?」

こちらの方が恥ずかしくなって、つい素っ気なく本題に戻ってしまった。

それに対して、鷹池も平静をもって返してくる。

「ええ、お陰さまで。形から匂いや味まで全部覚えてるけど、思い出しても嫌な気分にならないもの。チンコチンチン♪ ……ふ、あんなものに怯えていたのがバカみた

いだわ」

自ら露骨にその名を口にしても、恥じらう様子は見られない。これはこれで女子としてどうかと思うが、克服だけは確実にできたようだ。

ただ、さすがにそこまで鮮明に記憶されると、次の男は僕よりも大きいか、硬いか、という比較になってしまいかもしれない。それはそれで、恥ずかしいぞ……？

「よ、用が済んだならシャワー浴びて帰れ。僕には片付けも残ってるんだ」

堂々としている鷹池に倣って、僕も股間を意識することなく堂々と立ち上がる。しかし、彼女の豹変っぷりに、僕は思わず前を隠してしまった。

「あつ、何でおちんぼ隠すの!!」

お前の委員長ヅラが一瞬にして崩れたからだ！

「鷹池……口調が戻ってるぞ」

「……あつ、ん、ん……もう大丈夫。だから早くそのチン……ち……」

キリリと眉を引き締めたのも束の間。

「……おちんぼお……♡」

これはマズイな。僕は股間を押さえながら逃げるように浴室へと駆け込んだ。

「待ってよーちゃん！ 一緒に入ろっ♪ おちんぼ洗ってあげるから♡」

「お前は床でも拭きながらそこで待ってる！」

アイツ……ある意味治ってないぞ!? 変に狼狽することはなくなったものの、やっぱり振る舞いがおかしくなっている。

とはいえ……拒絶するよりはまだマシか。鷹池と付き合うことになる男が、彼女の肉欲に引かない寛大さを持っていることを祈っておこう……。

\*\*\*

あんな終わりで良かったのか? とは思うのだが……とにかく、僕はあれ以来鷹池とは逢っていない。本番には至っていないとはいえ、僕たちは互いの男女を見せすぎってしまった。今更これまでどおりの関係など続けられなかっただろう。できれば、記憶が風化するまでアイツとは距離を置いておきたい。

何故なら、僕には礼菜がいるのだから。

礼菜を大事にしていかなくてはならないのだから。

礼菜が望むことなら、僕は最大限に努力しよう。

だから……これがギリギリである。

礼菜から預けられた一本の鍵を上着のポケットに仕舞い込んで、僕は最寄りの駅まで来ていた。最寄り——といっても、高校時代に使っていた街の路線のものではない。

大学生生活も最初の一週間を乗り切り、諸手続きもようやく済んだ。ここから本格的に授業が始まるのだらう……といったところで初めての週末。早速礼菜が我が家に遊びに来ることになっている。それも、終電間際という時間帯に。

この線は、元々本数は少ないが、特に学校のない休日のダイヤはスカスカだ。一時間につき一本しかない時間帯は、思わず見逃してしまいそうなほどに儂い。

そんな過疎地域に……いや、過疎地域だからこそ、彼女はやってくるのだらう。僕は彼女に言われていたとおり、最後尾車両の停車位置で待っている。やはり、こんな時間に、こんな駅で、下り電車を待っている乗客は他にはいない。

時間通りの音声ガイダンスから程なくして、目当ての列車がプラットフォームに入ってきた。先頭から一両、二両……そして、四両編成最後の扉の窓ガラスを隔てて、僕は恋人と目を合わせる。礼菜は、すっかり出来上がっていた。心も、そして体も。

彼女が本来望んでいる姿で、ここまでの道のりを満喫してきたのだらう。手すりに背中をより掛けて、うっとりとしちらを見つめている。

だが、出来上がっているのは……僕も同じか。電話口では反対しながらも、彼女がこの姿で僕に逢いに来てくれるのを僕は望んでいた。

心の中でそんな彼女を思い描きながら、身体を燻らせていた。だから僕も、コートのボタンを閉じていない。

右手で前を合わせつつ、左手で建前から本音が突き出さないよう押さえ込んでいる。しかし、彼女が到着した今、そんなことを気にする必要はない。彼女が彼女であるのだから、僕が心配することなどないのだろう。

すわりと肩を反らせて袖を抜き、パツとまとめて小脇に抱えた。  
そして……

この電車は、自動的に扉が開くことはない。

車両の外側に備え付けられたボタンで開くのだ。

それほどまでに乗客数が少ないということなのだろう。

だからこそ安心して待ちかねていた彼女を抱きしめることができる。

それが、どんな姿であろうとも。

僕は上着のポケットを外側から握りしめる。

その手の内感じられるのは、確かに硬く尖った金属片。

それなら、何も慌てることはない。

すべては彼女の想定範囲内であり、その中でも最も過激な展開だっただけではないか。

そんな淫靡な一幕がプシュウと音を立てて開かれる。

舞台上で待ちわびていた主演女優に、僕は正直な賛辞を述べた。



その願いを叶えるべく、僕もまた非紳士的な姿で車両に乗り込む。  
念の為に軽く車両を見回してみると――

「!?」

すぐ傍の網棚に荷物が載っている！ ボックス席なので背もたれの向こう側は見えないが……まさか……!!

しかし、礼菜は構わず僕を求めてきた。

「早く！ このままっ！ お願いします……っ！」

このまま……ここで……？ 手摺りに括られ動けない礼菜を犯せというのか!?  
確かに、そんな彼女の姿はとんでもなく魅力的である。

僕でなくても、男なら誰でも犯してしまいたくなるだろう。

だからこそ……こんな場所ではマズイ。

僕だけならともかく、僕以外の誰かがいる場所では！

（礼菜っ！ 近くに人がいるのか!?）

（でもっ、寝てるので……早くっ！ あたし、もう、我慢できませんっ!）

小声で押し問答している間に扉は閉まり、列車は走りだしてしまった。もう後戻りはできない。

だったら……

少し痛いかもしれないけど我慢してくれ！

僕は彼女の全身を、両膝の下から持ち上げる。背中をポールに擦りつけてしまったが、彼女の要望に応えるにはこれしかない。

信じられないことに、こんな状況にも関わらず僕は興奮を煮え滾らせている。彼女の水路に導かれながら腰を差し出すと、そのまま……スルン、と飲み込まれてしまった。

「……………んっ……………♥」

車両の走行音が礼菜の呻きを掻き消してくれる。だが、それも彼女が我慢しているからこそ。その膣内の締めまり方から、既に絶頂かけているのが判る。何しろ、自分で両手を後ろから縛っていたのだから、触りたいところにも触れない。性欲を爆発寸前まで膨らませて、僕を待っていたのだろう。

だから、ひと駅も持たずに彼女は絶頂を迎え、その唇が開かれる！

「あっ——」

ギューウウ、と締め付ける礼菜を感じながら、僕は彼女の口を吸い込むようにキスで潰した。

ゴツンとステンレスの柱に後頭部をぶつけてしまったはずだが、彼女に気にする様子はない。舌先の方で繋がる感触を楽しんでくれている。

僕もこのまま余韻に浸りたいところだが……残念ながら、次の駅は間もなくだ。

「先輩……ここで降りましょう……」

礼菜から言われなくとも、ここからは早く退散しておいた方が良いでしょう。僕は床に落としていたコートを羽織る。そしてポケットから鍵を取り出すと、彼女を拘束から解放した。

隣の駅は僕も初めて降りる。幸いなことにホームに待ち人はいなかった。

なので、僕が乗務員からの壁になれば誤魔化すことは容易い。

二人ピッタリと背中とお腹を合わせて下車していくさまはさぞ不審に映ったことだろう。

それでも電車は何事もなく出発してゆき、僕と礼菜だけが取り残された。眼前に広がる自然の溢れる景色には、少しだけ安心させられる。

そういえば、前の駅までは大学のために複線を引つ張ってきていたが、ここはもう単線だったか。照明すらまばらで、背後は崖、正面は森。さらに改札は無人の駅である。

ようやく一息ついたところで……僕はとんでもないことに気がついた。

彼女の右手には黒い紙切れ——切符が摘まれ、左手は空。

肩にも、背中にも何も背負われていない。

「礼菜……服はっ?!」

脱ぎ慣れている彼女がこんな初歩的な失敗を!! ……と真っ青になりそうだったが、礼菜の瞳はさらに熱を増していく。

「服は……先輩が明日お願ひします……ね?」

か……確信犯か!!

ここから僕の家まで人<sup>ひと</sup>気のない山道だと知って、こんな大胆な露出プレイを……!  
「せんばいもお……脱いでくださいあい……♥」

ホームと外の森の間は申し訳程度の柵で仕切られている。そこに手を突いて、礼菜はお尻で僕を誘い始めた。

終電が行ってしまった以上、いよいよ誰も来ることはないだろう。

もう誰ひとりとして。

僕だって彼女の肌に肌で触れたい。

しかし、ここは駅のホームである。

とはいえ、終電は行ってしまった。

だからといって、こんなに開けていてはどこから見られているか判らない。僕の中の理性と本能がせめぎ合っている。

が……

かのじよ  
臆おその温かさが陰茎ぼくから消えていない。

そして、それが目の前で僕を待ち望んでいる。

この結果は……最初から判っていたことか。

抵抗したところで意味もない。

知らず知らずのうちに、彼女に言われるがままに唯一の世間体を足元へと落とし、

彼女と同じ姿で、その腰に手を当てた。

「今度は、先輩も気持ち良くなってくださいね♪ もちろん最後まで、あたしの臆内なか

で♡」

そんなに誘われては、僕としても断り切れない。ここがどこかも忘れて、僕は礼菜  
の中に自ら飛び込もうとしている。

「はうっ、はあうう！ 先輩っ！ コースケせんぱあい……！」

辺りは静かすぎて、僕たちの肉の音しか聞こえない。

暗闇を切り取るようなスポットライトを浴びながら、僕たちは愛を繋げてゆく。

木々の香りと鉄の匂いの入り交じる公の場所ではあるのだが……

今だけは、僕らに貸し切らせて欲しい。

露出少女と痴女の  
モラルなき戦い!

# 裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる  
露出少女・埋竹礼菜  
大好きな男と子供を成すことに  
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。  
そんな三人に翻弄され続ける  
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



大学生編  
その2  
2017年3月  
公開予定

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>

オンナ  
たぎる♀に

おびえる♂  
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、  
女の身体は贅肉扱い。  
一方、成人向けコーナーには  
半裸の男優ポルノがズラリ——  
女が迫り、男があしらう、  
そんな世界があったとしたら……？  
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで  
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜  
男女の性衝動が反転した社会とは  
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

# ア ス ト ラ ル リ ン ズ

兄は指揮官に 妹は銃殺刑に

新政府軍の警備兵である兄と  
旧政府軍の首謀者である妹。  
ふたりの自己都合が交錯する  
陰謀豊かなお手軽コメディ!?

テロリスト  
迫り来る**反逆者**  
プリンセス  
担がれる**民間人**  
そして... **アホの子**  
**掻き乱す問題児!**

お兄ちゃん争奪戦...  
**勃発!?**

R-18な後日談的短編集  
「妹はお風呂吉良いで 王女は珈琲がお好き」を現在リライト中!  
表紙・挿絵も一新しまして、2016/11/25公開予定です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/>

# 僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、  
裸で野山を駆け回るのが  
好きな少年。  
非日常を求めて裸になり、  
その快感に  
目覚めてしまった少女。  
孤独に背徳的性欲を  
膨らませてゆく二人だったが、  
ついに――

立派に  
育った  
露出癖

わたしとあなたの  
露出交換日記

スピンオフでも  
野外で全裸！

野外で裸に  
なりたい男と  
他人の痴態を  
覗きたい女。

出逢ってはならない三人が  
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>

正義の投与の行く末は  
いじめられっ子の処方箋

添牙いろは

イジメ撲滅運動——

とある高校で突如始まったこの騒動に  
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。

しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？

そんな疑問に突き当たる。

悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？

そして、運動を取り仕切る

学級委員・あまゆみ雨弓来禾の真の目的とは……？

イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



SOREGA Kanojo no  
それが彼女の生存戦略!

未知なる世界で  
どう生き延びる...?

seizon senryaku

学校が異世界に飛ばされた!?  
それでも見知らぬ大地の上で  
誰もが遅しく生き延びてゆく。  
ある者は『力』で、  
ある者は『智』で、  
ある者は『心』で、  
ある者は『愛』で。  
そして.....  
彼女たちは元の日常に  
帰ることができるのだろうか.....!?

詳しくはWebで  
<http://soekiba.net/4girls/>

ゲーム会社でぶっくった  
ゲーム

ゲームって  
…ナンだ？

ただシナリオを追ってだけで  
ゲームと呼べるのか？  
ボタンを連打するだけでゲームなのか？  
そもそも、ゲームとは一体何だったのかを  
考える一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>



# 空色書房

Sleeping under the sky



いつでもどこでも真っ裸！  
そんな露出少女・埋竹礼菜まいたけれいなにも  
めでたく彼氏ができました♡  
ところが……

恋人が大学へと進学した際に  
執念深き幼馴染・鷹池たかいけの魔の手が迫る！  
自宅に連れ込もうとする誘惑を拒んだ結果、  
ならばこの場で、と公共の場にも関わらず——!?